



2 番目の語り手

夢にいざなえ



森木立を抜けたところに建つその屋敷の庭は一年中薔薇の花であふれかえっていた。まるで薔薇で屋敷を隠しているように気配を感じさせない屋敷であったが、このところ老若男女が出入りしている姿を眼にする。どうもうさんくさい人間たちの集まりのようだ。

屋敷を通り過ぎ、また森の奥へと進む道を行き、道が二手に分かれる頃には微かに水のせせらぎが聞こえ、遠慮がちな鳥のさえずりが聞こえてくる。木漏れ日が眩しく歩を早めしばらく行くと落ち葉を踏みしめる音しか聞こえなくなっていた。陽は樹々のむこうに姿を消し、訪れたあまりの沈黙にこれは現実なのかそれとも夢なのか——世界が死んでいるような静けさだ。

細い声が聞こえる。木の蔭で長い髪のちいさな女の子がじゃがんで泣いている。

元来女性が苦手で、ましてや子どもはもっと苦手なので無視して通り過ぎるつもりだったが、顔をあげた子どもの怯えた眼に一瞬心が締め付けられた。

泣いただけで腫れたのではない顔を地面に向けながら、親に虐待されていて今も逃げ出してきたところだと切れ切れに話す子どもに慰めの言葉もかけないまま、また歩き始めた。

「あんた！どこ行くの？ここから先はあたしのうちのもんなだからお金払わないと行かないよ」

声の方を向くと15歳くらいの少女が今にも飛びかかってきそうな荒れた眼をしてこちらを睨んでいる。世の中の善を拒絶しているように挑戦的な少女の眼は涙が出ていないのに、泣いているように見えた。答える気もなく黙って踵を返した後ろ姿に少女の声はなおもおおいかぶさり

「なに、無視してんだよ。金払えよ」

と追いかけてくる。細い身体が行く先を塞ぐ。

「なんだよ、その目つきは」

いつのまにか哀れむ眼をしていたのだろう、少女は敏感にもそれを感じ取っていた。

「ちょっと見てみな、面白い芝居が始まるみたいだよ」

まるでサーカスが来たような楽しげなトーンに変わった少女の視線の先を辿ると、男に追いすがっている20歳くらいの女がいた。口汚く男をののしっている女の言葉から、お金を取られ、だまされたという話が耳に入ってきたがそんなよくある話に興味ももつこともなく視線を先の道に戻そうとすると、女がこちらを振り向いた。

まただ。またこの視線。

その頃にはこの道を来たことを後悔し始めていた。この森はいったい…。



怯える子どもの視線…
世の中を恨んでいる少女の視線…
全てを諦めたような女の視線…

もうその3人の視線を心からはずすことが出来なくなってしまった。

そしてその次に逢うことになる筈の女が心の中に見えてしまった。

もう先に進みたくない。もうあとにも戻りたくもない。でも塞ぐことが出来ない眼には、心の中の女が現実として見えてしまった。

30歳くらいの女が大きな木の枝に紐を下げて今にも首を吊ろうとしていた。動こうとしない身体を無理に地面から剥がして側に行き、一段高い位置にいるその女の何も映していないような眼をみつめ、声をかけた。

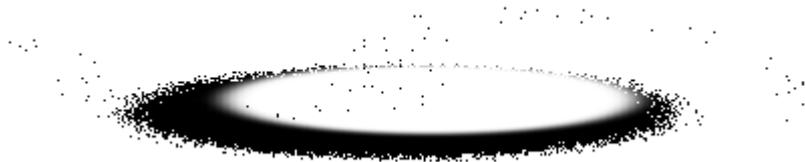
「大丈夫だから」

もはや気がつかないふりをしているわけにはいかなかった。あれはあたしだ。

小さなころから親に虐待され、人を見ればだますことしか思わなくなった挙句に男にだまされ捨てられ、自殺しようとしているあの女たち、あれは全てあたしだ。

ふりほどこうとしても身体の中に突き刺さる4人の視線はどんどん身体に染み付いて来る。なんて昏い森。早くここから逃げ出さないと。もうあたしは幸せになったんだ。いつまでも過去の残像にふりまわされるわけにはいかない。森の奥に住む婦人に助けられ今は生まれて初めての穏やかな生活をしているんだから。

もう大丈夫、大丈夫なんだから。



屋敷の一部屋に11人の男女と一人の少年が婦人を囲んでいた。

そのうちの一人の男が口を開いた。

「婦人も人がいいですよ、首を吊ってたのを助けただけじゃなく、面倒をみてるなんて・・・」
溜息に混ざる言葉をまた別の男が引き継ぐ。

「それもこんな身元もわからない女のね」

男が眠り続ける女を振り返ると、それにつられたように全員が部屋の隅のベッドで寝ている女を見つめた。婦人は人の輪から離れ、ベッドの脇に立ち女の髪をなで始めた。

「ごめんなさいね、夢のお話を聞かせてもらおう集まりだったのに」

11人の男女は婦人のうしろに行き、寝ている女を見つめた。

「そんなことはいいんですが、この人いつ目覚めるかもわからないんでしょう？」

ゆうべの食事の時間に、森の奥まで来たことがどんなに大変だったかをまくしあげていた男が呆れるように言った。その言葉に婦人は、まるで長いときを一緒に過ごした友人を思うように悲しげな顔で呟いた。

「本人が目覚めるのを拒否しているのかもしれないわね・・・」

おとなの間を潜り抜けて少年がベッドに近づいた。

「最初は辛そうな顔をしていたのが今日は随分と穏やかな表情になって来たのよ」と婦人が言うと同時に、少年が声をあげた。

「ねえ、見て！ほら、婦人に髪の毛をなでてもらって嬉しそうだよ！笑ってるよ！」

少年の言葉を確かめるように輪の中で一番若いと思われる女が前に出て、眠る女の顔をのぞきこんだ。

「ほんと！優しくされることが嬉しいんですね。自殺したいと思うほど辛かったんだから、この人には今が幸せなのかもしれませんね」

若い二人の言葉に励まされたように婦人は微笑み、眠る女に届くように優しく、しっかりと声をかけた。

「きっといい夢をみているんでしょうね。この人に名前をつけてあげようかしら。新しい人生が始まっているみたいだから・・・」



女に向けた微笑みを残しながら振り向いた婦人の視線は一人の男に止まった。

「突然のお客様でお話が中断してしまったわね。

それじゃ、次はヤザワさんだったかしら、夢のお話を聞かせてくださいね」